

自主防災活動事例集

(熊本地震対応編)



熊本県

目次

はじめに.....	1
地域の団結力で乗り切った避難所運営（川後田・加勢自主防災会）.....	2
地域住民が救った9名の命（大切畑自主防災会）.....	4
行政区の仕組みを生かした情報収集（上六嘉地区自主防災会）.....	6
ひと手間かけた炊き出しごはん（黒石団地区自主防災組織）.....	8
日頃の活動が災害時の信頼と安心に（黒髪第4町内自主防災クラブ）.....	10
春竹防災の日で得た知識と意識（春竹校区15町内自主防災クラブ）.....	12
「でくるしこ」でつなぐ防災まちづくり（向山校区まちづくり委員会）.....	14
防災地図が役立った安否確認（舞原自主防災クラブ）.....	16

合志市

黒石団地自主防災組織

熊本市

黒髪第4町内自主防災クラブ

春竹校区15町内自主防災クラブ

向山校区まちづくり委員会

舞原自主防災クラブ

南阿蘇村

川後田地区自主防災会

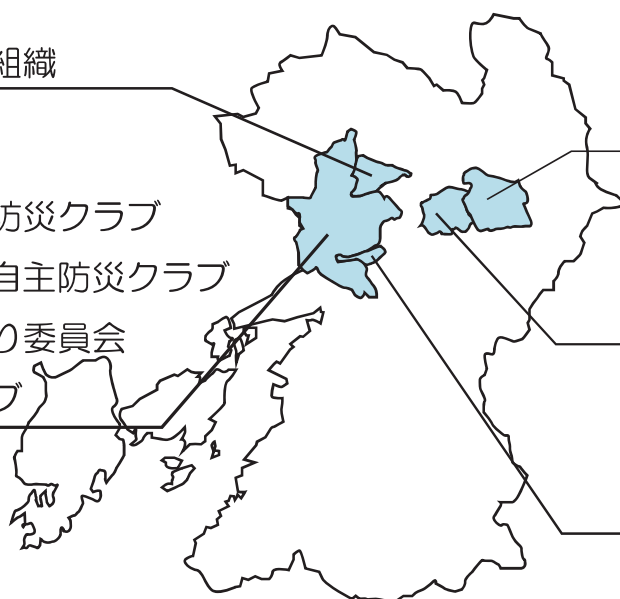
加勢地区自主防災会

西原村

大切畑自主防災会

嘉島町

上六嘉地区自主防災会



はじめに

熊本地震での自主防災組織の活躍

本事例集では、熊本地震の際、住民の安否確認や情報の収集と伝達、避難所の運営などを行い、共助の力により困難に立ち向かった自主防災組織の活動の事例を紹介しています。

地域の特徴や人材を生かして問題解決に向け、地域が一体となって自主的に活動しました。例えば、地震後すぐに住民が野菜やお米を持ち寄って炊き出しを行ったり、日頃からイベントを開催するなど、「顔の見える関係づくり」を行ったりしたことで、熊本地震の際、炊き出しや安否確認などを速やかに実施できました。

自主防災活動事例集の使い方

熊本地震対応編以外にも平常時編、災害時編を発行しています。平常時編では自治会活動に防災を取り入れた事例や地域団体と連携した活動事例をまとめています。また、災害時編では災害対応マニュアルづくりや訓練などの事例を紹介しています。

お住まいの地域に合わせた活動を行えるよう、参考事例としてご覧ください。

今回掲載している「黒石団地区自主防災組織」と「黒髪第4町内自主防災クラブ」は平常時編でも紹介しています。



平常時編
(平成 26 年度発行)



災害時編
(平成 27 年度発行)

熊本県 自主防災活動事例集

検索

地域の団結力で乗り切った避難所運営



かわごだ

かせ

川後田自主防災会・加勢自主防災会（南阿蘇村川後田地区・加勢地区）

熊本地震による被害と活動状況

南阿蘇村は本震で最大震度 6 強を記録し、甚大な被害が発生しました。

斜面崩壊による国道 57 号の寸断をはじめ、阿蘇大橋や俵山トンネルの崩落など、主要な交通ルートが不通となり、避難者は物資の入手や情報収集に苦労しました。

このような状況下で、避難所となった南阿蘇西小学校では川後田地区と加勢地区の自主防災会の役員を中心に、避難所運営が行われました。役員とのチームワークと日頃からの住民間の絆により、衛生管理や炊き出し、水の補給などが自発的に行われ、トイレの劣悪な使用環境や水不足の問題などをひとつずつ改善していきました。

熊本地震時の自主防災組織の主な行動

平成 28 年
4 月 14 日

前震

自主防災会役員と地区の駐在所員が家をまわって住民の安否を確認

4 月 16 日

本震

川後田地区の会長が村から南阿蘇西小学校体育館の使用許可を得る

4 月 17 日

川後田地区では朝から消防団と住民を南阿蘇西小学校体育館に避難誘導

加勢地区では加勢公民館で炊き出しを行う

4 月 18 日

加勢地区の住民が南阿蘇中学校から南阿蘇西小学校に移動

4 月 19 日

大量の支援物資を受け入れ

（自衛隊によるシャワーの設置）

4 月 20 日

住民全員の安否、居場所の確認が完了

南阿蘇西小学校校長と教頭、南阿蘇村中学校教員から生徒の安否確認が完了したとの報告を受ける

4 月 23 日

危険建築物の撤去や公民館の片付け、炊き出し・掃除等を役割分担し、実施

4 月 26 日

（自衛隊による仮設風呂の設置）

5 月 23 日

小学校再開のため避難所を閉鎖（避難者の多くは、みなし仮設住宅や 2 次避難所へ移動）



避難所となった南阿蘇西小学校体育館

ポイント

避難した南阿蘇中学校は配給が少なかったため、各家庭から食料を持ち寄って炊き出しを行いました。

ポイント

南阿蘇中学校は避難者が多く、衛生環境が悪化していたため、南阿蘇西小学校が開放されていることを知り、移動しました。

ポイント

地域行事などで日頃から顔見知りの関係が構築できており、安否確認がスムーズにできました。

避難所運営を円滑にした3つのポイント

1. 住民一人一人の特技を生かす

看護師による衛生管理や有志による建物解体や炊き出しなど、住民のスキルを生かして、役割を担ってもらうことで様々な問題が解決されました。

2. 地域行事が活発

震災前から集落ごとに祭りや花見などの地域行事を頻繁に行っていました。これらの行事によって、住民のつながりが維持され、避難所生活でも助け合うことができました。

3. 日頃の備え

白川に面している地区のため、梅雨の時期は大雨による予防的避難を頻繁に行っていました。実践的な経験の積み重ねを地震時にも応用することができました。

熊本地震の教訓を踏まえた今後の課題

●情報収集

発災後2、3日は、避難所にテレビがなく、阿蘇大橋の崩落や土砂崩れなどの村内の被害情報さえわかりませんでした。

災害時でも情報収集できる手段を備えておくことが重要です。

→ **防災ラジオなどの情報収集手段を備える**

●物資の受け入れ方法

支援物資が実際の需要よりも多く届き、配布が滞りました。

受援の体制を整えていくことが大切です。

→ **物資の保管や配布の要領を再確認する**



阿蘇大橋付近のがけ崩れの様子



支援物資が並ぶ避難所

地区の基本情報（人口、世帯数、高齢化率は平成30年1月末時点）

【川後田地区】

人口	152人	世帯数	68世帯	高齢化率	40.7%	想定される主な災害	地震、風水害
地理的条件	白川の北側に位置し、集落周辺には田畑が広がっている。また、周囲には急斜面も多く、高低差のある地域となっている。特に土砂災害の危険性が高い。						

【加勢地区】

人口	176人	世帯数	75世帯	高齢化率	35.2%	想定される主な災害	地震、風水害
地理的条件	白川沿いに位置し、梅雨の時期は洪水の危険性があるため、南阿蘇西小学校に予防的避難を行う住民も多い。						

地域住民が救った9名の命

おおざりはた
大切畑自主防災会（西原村大切畑地区）



熊本地震による被害と活動状況

西原村大切畑地区は震度7の揺れにより地区の約9割（28棟）が全壊しましたが、消防団と住民が協力して倒壊家屋から9名を救出しました。また、道路の寸断により、早期の公助が期待できなかったため、住民自らが瓦礫の撤去や納屋の解体を行いました。

住民が主体となって活動したことで復興に向けた話し合いも活発に行われ、いち早く地区の将来像を描くことができました。



震災直後の大切畑地区

熊本地震時の自主防災組織の主な行動

平成28年
4月14日

前震

近隣住民同士で声を掛け合って安否を確認

4月16日

本震

消防団と連携して安否確認

倒壊家屋の中にいた住民9名を消防団と救出

各家庭の電気ブレーカーを落として回る

4月17日

大切畑地区復旧対策本部を立ち上げる

班に分かれ、夜警や復旧作業等を実施

4月20日

携帯電話の番号を記載した連絡網を作成

全壊家屋からユニットバスをクレーン車で取り出し、公民館横にお風呂を設置

5月23日

夜警などの活動を終了

地震の揺れによる地割れ



ポイント

夜中であったため、消防団員のヘルメットに付属しているライトが役立ちました。

倒壊家屋



ポイント

携帯電話を所有していない人には家族または近隣住民が直接口頭で伝えました。

ポイント

地区内の大工やガス店など個人の得意分野や技術を活かして設置しました。

訓練の積み重ねで助けた9名の命

西原村では2年に1度、村が主催する発災対応型防災訓練があり、大切畑地区でも避難訓練を行っていました。

熊本地震の本震時も訓練と同様に、消防団員7、8名と住民数名で地区を周り、余震が続く中、消防団員がチェーンソーやジャッキを使い、倒壊家屋から9名を無事に救出しました。



訓練の様子

地区で決断した復興への取り組み

1. 復旧作業の役割分担

住民が記録班、水道班、作業班に分かれ、発災から約1か月の間、復旧活動をしました。

記録班	毎日の日誌をつけ、カメラで地区内を撮影しました。地震の記憶を伝えるために、地区内に写真を展示する予定です。
水道班	配管の場所を把握している高齢者と地元の水道工事店、作業を補助する若手がチームを組んで、水道の点検や修理などの復旧作業を行いました。
作業班	「自分たちの地域は自分たちで立て直したい」という思いから、土木機械を借りて、住民自らが瓦礫の撤去や納屋の解体を行いました。

2. メディアへの対応

住民全員で「メディアはすべて受け入れよう」と決め、震災後の混乱した状況でも積極的にメディアを受け入れ、地区の被害状況などを発信した結果、多くの物資支援が届きました。

余った物資は仮設住宅に移った住民に配布し、仮設住宅での生活を支援しました。

3. 復興まちづくり計画作成までの道筋

復興の工程を学習するため、福岡県西方沖地震（平成17年3月）で被災した玄海島に視察に行きました。玄海島の復興まちづくりの手法を参考に、今後の地区の復興について考えました。

その後、住民で40回以上の話し合いを重ね、地震発生から1年3か月後の平成29年7月に、住民が復興まちづくり計画に合意し、事業化に向けて動き出しています。

話し合いは当初、世帯主のみが集まっていたましたが、世帯主から家族への情報伝達がうまくいかなかったため、平成29年4月以降は全ての住民を集めて話し合ったことで、より良いアイデアが集まるようになりました。



住民による復旧作業



復興に向けた話し合い

地区の基本情報（人口、世帯数、高齢化率は平成30年1月末時点）

人口	73人	世帯数	25世帯	高齢化率	39.8%	想定される主な災害	地震、土砂災害
地理的条件	西原村大切畑地区は地区の約3分の1の面積が急傾斜地崩壊危険区域に指定されており、大雨の際は安全な場所に避難する必要がある。						

行政区の仕組みを生かした情報収集



かみろっか 上六嘉自主防災会（嘉島町上六嘉地区）

熊本地震による被害と活動状況

嘉島町は本震で震度6強の揺れを記録し、上六嘉地区では全215棟のうち、約82%もの住宅が被害を受け、公民館も被災しました。

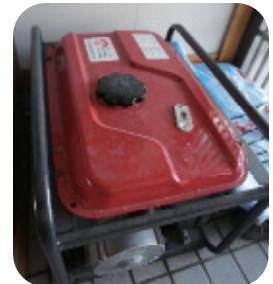
前震発生後、会長を中心として自主防災会が住民の安否確認や町役場への被害状況の報告を行うとともに、住民へチラシ配布による物資支援情報の周知や自主避難所の運営等を行いました。



炊き出しの様子

熊本地震時の自主防災組織の主な行動

平成28年 4月14日	前震	停電したため、発電機を公民館前の広場に設置
4月16日	本震	ポイント 夜間でも使用できるようにしました。 車のライトでトイレを照らす 会長が把握していた連絡先と地元有志で作成していた住民台帳で安否を確認 公民館前の広場で住民が協力して炊き出し ブロック塀の崩壊箇所を片付けて通路を確保 評議員が担当地区で被害状況等を把握
4月18日		嘉島町東老人憩いの家を自主避難所として開設し、夜警や物資の配給を行う
4月26日		物資や罹災証明等に関する情報をチラシで全世帯へ伝達
5月20日		自主避難所を閉鎖



現在も備えてある発電機

ポイント 熊本地震の発生前に連絡網の作成など、連絡体制を整えていたことで、安否確認を円滑に行えました。

熊本地震時に必要だと感じたもの

1. ブルーシートとロープの備蓄

本震発生直後に大雨が降ったため、瓦が落ちた家にブルーシートを被せようとしたのですが、ブルーシートとロープが足りず、雨ざらしになった家がありました。

2. 安全な避難所

地区の公民館は地震により被災し、屋内に避難できませんでした。指定避難所までは徒歩10分以上かかるため、町が管理する嘉島町東老人憩いの家を自主避難所として使用しました。

3. 「明かり」「トイレ」「水」

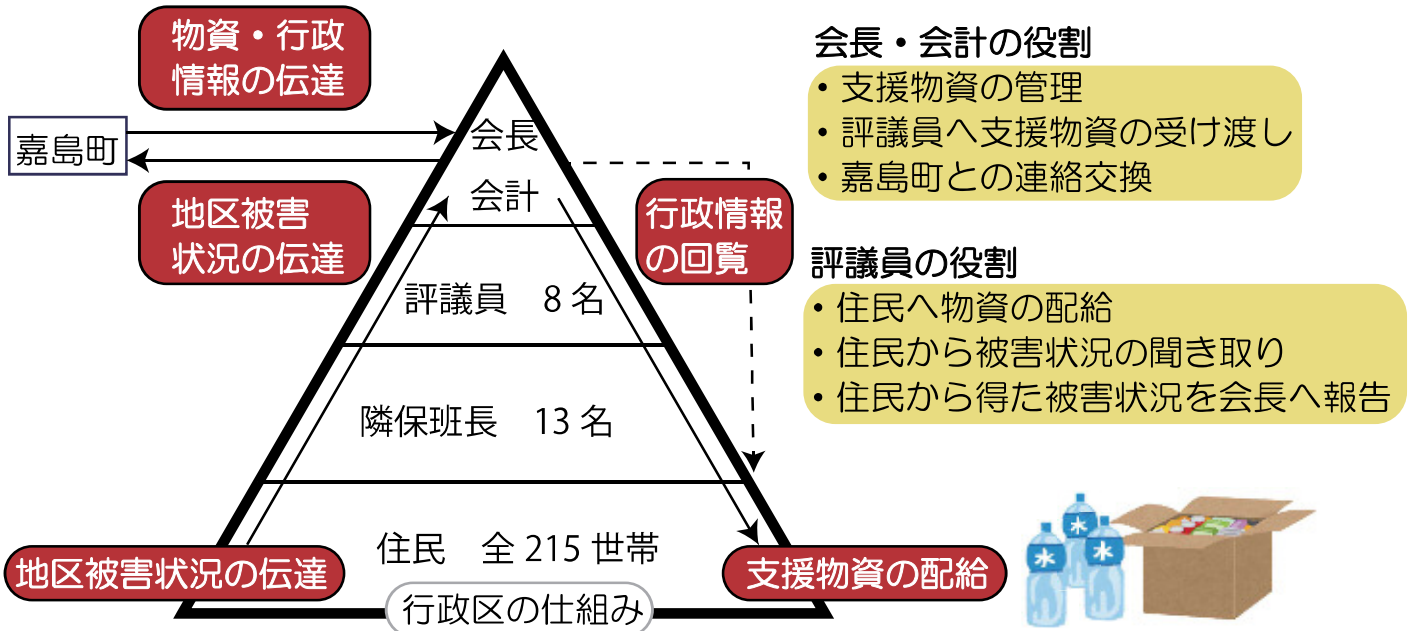
車のライトを使用して明かりを確保し、公民館のトイレを使用しました。また、電気が復旧したことにより、ポンプで水を汲み上げることができました。



平常時における行政区の仕組みを生かした熊本地震時の対応

行政区の仕組みを活用し、避難所に集まった評議員 8 名が各担当地区の住民に物資を配給しました。また、嘉島町役場から得た情報は会長がチラシで全世帯へ配布しました。

さらに、物資を配給する際に地区の被害状況を評議員が確認し、その情報を会長を通じて、嘉島町役場へ報告することができました。



熊本地震の経験を踏まえた避難訓練

平成 29 年 5 月 20 日、上六嘉地区では会長が避難訓練を企画し、仮設住宅の住民が参加して指定避難所までの経路を歩いて確認しました。今後も梅雨入り前に毎年実施する予定です。

【大まかな訓練の流れ】

1. 会長が役員の子呼を行い、被害状況の確認や避難の呼びかけなど役割を分担
2. 情報伝達係が拡声器で仮設住宅の住民に避難を呼びかけ
3. 老人会の会員は配布された防災リュックを背負い、広場に集合
4. 点呼を行い、徒歩 10 分程度の指定避難所へ避難



ポイント 地震後、老人会は全会員に防災リュックを配布しました。中身はタオルや防寒シートなど高齢者でも長時間持つことができるような軽いものが入っています。



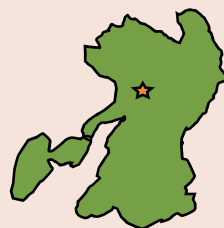
防災リュックと中身

地区の基本情報（人口、世帯数、高齢化率は平成 30 年 1 月末時点）

人口	737 人	世帯数	259 世帯	高齢化率	39.8%	想定される主な災害	地震、風水害
地理的条件	嘉島町は湧水のまちとして知られる。加勢川は堤防建設により水害が減ったが、現在でも矢形川が頻繁に増水し決壊するおそれがある。新興住宅地ができ人口が増加している。						
熊本地震での被害	全壊 53 戸、半壊 46 戸、大規模半壊 9 戸、一部損壊 68 戸 (平成 28 年 11 月 30 日時点区長ら地域住民調べ)						

ひと手間かけた炊き出しごはん

くろいしだんちく
黒石団地区自主防災組織（合志市黒石団地区）



熊本地震による被害と活動状況

合志市黒石団地区は震度6強の揺れにより、多くの住民が地区の公民館や指定避難所へ避難しました。

地震発生後の数日間、近隣スーパーでは品薄状態が続き、水道水も濁った状態だったため、飲料水の確保が第一の課題でした。

黒石団地区公民館では自主防災組織や地区の婦人部が農家からお米の購入や湧き水汲み、炊き出しを自発的に行ったことにより、食料や水不足の課題を解決することができました。



炊き出しの様子

熊本地震時の自主防災組織の主な行動

平成 28 年
4 月 14 日

前震

地区の災害対策本部を黒石団地区公民館に開設

民生委員が避難行動要支援者の安否を確認

4 月 15 日

災害対策本部を解散し、自主避難所（公民館）を閉鎖

4 月 16 日

本震

班長が安否確認し、区長に報告

災害対策本部を再び黒石団地区公民館に開設

アルファ化米おにぎりを作り、配給

水や食料を各地で調達

ポイント

水などを調達するために、トラックや道具などを個々が協力して出し合いました。

4 月 17 日

役員 3 名を中心に自主避難所を運営

4 月 19 日

緊急役員会を開き、16日に開催予定であった総会を中止するとともにその後の対応、今後の避難活動について話し合う

災害対策本部を解散し、自主避難所を閉鎖

4 月 22 日

市から届いたペットボトルの水を公民館で配給
配給していることをパトロールカーで周知



公民館外の様子



テレビを見る住民



緊急役員会の様子



市から配給された水

炊き出し時の工夫

黒石団地区公民館では婦人部を中心に炊き出しが行われました。地震が発生した4月は自治会組織の役員が交代した時期でしたが、婦人部2名の呼びかけによって、部員が地域のために集まり、ひと手間かけたサンドイッチなどを振る舞いました。

1. 協力者を募る

連絡網ではなく、中心となって動いていた2名が直接、婦人部の一人ひとりに「炊き出しを手伝ってほしい」とのお願いの電話をしたことにより、協力者が集まりました。

2. メニューをひと工夫する

食パンが支援物資として届きましたが、そのまま配らず、サンドイッチを作って配りました。

備蓄品ばかりの震災当時、ひと手間加えたサンドイッチは大好評でした。



手作りのサンドイッチ

熊本地震前からの取り組み

1. 自治会が運営するホームページ

広報委員がホームページを作成し、地域の情報を発信しています。
ホームページ URL <http://www.kuroisidantiku.jp/>

熊本県合志市黒石団地区自治会ホームページ

検索



2. 定期的な防災訓練の実施

東日本大震災以降、毎年3月の第1日曜日に防災訓練を実施しています。平成30年までに7回実施され、白いタオルを使った安否確認訓練や炊き出し訓練、AED講習、消火栓確認などを行っています。

3. 子どもたちを守るための防犯活動

地区の子どもたちを見守るため、防犯活動が活発に行われています。平成25年10月には防犯への取組が評価され、内閣総理大臣賞を受賞しました。防犯用のパトロールカーは震災時にも情報を周知する際に役立ちました。

4. 地域住民主体の魅力的な地域イベント

昭和49年に発足した黒石団地区は、つながりの強いコミュニティがなかったため、様々なイベントを開催し、新たなコミュニティ形成に取り組んできました。

イベントはお祭りや「どんどや」などに加え、B級グルメの販売や作品展といったものまで幅広く開催されています。

今後の災害に対して備えておきたいこと

自助の取り組み → 自助ができてこそ初めて他者を助けることができるため、まずは家庭内での備蓄や家具の転倒防止などを繰り返し呼びかけたい

地域のつながり → 公民館を拠点に住民同士でコミュニケーションをとれるように、イベントを継続して、災害時に助け合える関係性を築きたい

地区の基本情報（人口、世帯数、高齢化率は平成30年1月末時点）

人口	3,007人	世帯数	1,233世帯	高齢化率	29.0%	想定される主な災害	地震
地理的条件	平地で山や川が周辺になく、土砂災害や川の氾濫のおそれの低い地域である。						

日頃の活動が災害時の信頼と安心に



くろかみ 黒髪第4町内自主防災クラブ（熊本市中央区黒髪地区）

熊本地震時の活動

黒髪第4町内が位置する桜山中学校には最大時300人が避難しました。自主防災クラブは率先して避難所運営にあたり、4月25日までに延べ200名のクラブ員が参加しました。

避難所運営では、これまで自主防災クラブが買い揃えてきた間仕切りや毛布、椅子などを貸し出した他、食事・トイレ・給水の支援や防犯巡回なども行いました。また、在宅避難者にも町内広報で情報を届けました。

自主防災クラブが平常時からオレンジのビブスを身に着けて活動していたため、避難者から「オレンジのビブスを着ている人がいると安心できた」という声がありました。

熊本地震時の自主防災組織の主な行動

平成28年
4月14日

前震

オレンジのビブスと帽子を身に付け、すぐに桜山中学校に向かう

道端に座る大学生へ桜山中学校に避難するように声かけ

避難所の鍵の管理者と協議し、「自主防が責任を持ちます」と言い開錠

体育館と校舎の和室に避難者を誘導

ポイント 高齢・障がい者を段ボールの間仕切り場所などに誘導し、配慮しました。

3人1組で24時間防犯パトロール

車で避難してきた住民への対応

自主防災クラブ所有の広報車で避難の呼びかけ

ポイント 事故が発生しないよう、余裕をもった駐車スペースを確保し、エコノミークラス症候群の予防喚起を行いました。

ポイント 「避難所に逃げてください。逃げたくない人は家の中の安全な場所に居てください。」と伝えました。

4月16日

本震

避難者が増えたため、座る場所や配置の指示出し

避難者に困りごとがないか声かけ

ポイント オレンジのビブスによる信頼からトラブルはありませんでした。

4月18日頃

市の保管庫から直接物資をもらう許可を得る

4月25日

自主防災クラブとしての避難所運営を終了

5月9日

桜山中学校からの要望で、個人ボランティアとしてオレンジのビブスを外して5月9日まで避難所運営に参加

ポイント 避難した大学生に声のかけ方を教えました。その後も大学生はトイレの水運びなどで活躍しました。

熊本地震前からの取り組み

黒髪第4町内自主防災クラブは平成12年に発足し、町内に位置する桜山中学校や高齢者福祉施設などの地域施設と様々な交流を重ねてきました。特に、桜山中学校の生徒とは食育活動や防災塾を毎年開催しています。

また、東日本大震災の教訓から、平成26年に避難所でのプライバシー確保のため、段ボール間仕切りを自主防災クラブで購入しました。段ボール間仕切りは桜山中学校と事前協議をして学校の倉庫に保管し、毎年中学生と設置訓練を実施しています。

資源回収や交通安全の見守り運動、挨拶運動などの活動を通じ、地域における自主防災クラブの認知度は高く、自主防災クラブが着用するオレンジのビブスと帽子的認知度も上がっています。



段ボール間仕切り設置訓練

“顔が見える関係”をつくる日頃のしくみ

毎月2回、土曜日の朝に資源回収を行い、資源回収で得た資金を主な活動費としています。

資源回収には、活動費の調達以外に燃えるごみ削減や情報交換、各戸訪問による高齢世帯や独居世帯の安否確認などの目的や利点があります。

これらの活動を通じて築いてきた、“顔が見える関係”は災害時の迅速な安否確認につながっています。



自主防災クラブ所有の
パトロールカー



資源回収の様子

熊本地震の教訓とその後の対応

1. トイレの問題

ドアが内開きのため、洋式型のポータブルトイレの設置ができませんでした。また、古いトイレは流す時に使用する水の量が多く、バケツでの水汲みが大変でした。高齢者は使用後にバケツで水を流すことが難しく、自主防災クラブが水を流して次の人を案内しました。

2. 水・食料の問題

地震前から「3日間物資は来ない」と学んでいましたが、本当に3日間届きませんでした。指定避難所には200から250人分ぐらいの水・食料や資材を備蓄が必要と考え、自主防災クラブで水とお米の備蓄を始めました。

3. 体育館を開ける基準が共有できていなかった

地震後、桜山中学校の体育館の管理と開錠について学校と協議をしました。

地区の基本情報（人口、世帯数、高齢化率は平成30年2月時点）

人口	1,892人	世帯数	1,121世帯	高齢化率	31.1%	想定される主な災害	土砂災害、地震
地理的条件	白川の右岸に位置する。浸水被害は想定されていないが、周辺町内から桜山中学校に避難してくる可能性がある。北部に立田山があり傾斜が多い。立田山断層が存在し、活動した場合は震度6弱の地震が発生することが長らく指摘されている。熊本大学の東側に位置しており、学生街でもある。黒髪校区は18町内に分かれており、第4町内はその一つである。						

春竹防災の日で得た知識と意識



はるたけ

春竹校区 15 町内自主防災クラブ (熊本市中央区八王寺町)

熊本地震時の活動

春竹校区 15 町内は校区を横切る JR 豊肥本線によって指定避難所である春竹小学校と江原中学校とは距離がありました。そのため、春竹校区 15 町内自主防災クラブは、八王寺公民館を自主避難所とし、炊き出しや支援物資の配布などを行いました。

自主防災クラブの会長は 15 町内の自治会長、八王寺公民館長、春竹校区社会福祉協議会長も兼務していたため、八王寺公民館で活動する傍ら、夜は指定避難所である春竹小学校へ行き、2 か所で避難所運営に関わっていました。

熊本地震時の自主防災組織の主な行動

平成 28 年 4 月 14 日	前震	
	八王寺公民館を自主避難所として開設	
	自主防災クラブ会長と副会長が打合せ	
4 月 15 日	路上、空地、公園等を巡回し、八王寺公民館への避難を促す	ポイント 会長は校区社協の会長でもあり、地域の高齢者や障がい者を把握していたため、高齢者や障がい者を中心に声かけを行いました。
	町内の災害対策本部を八王寺公民館に開設	
	自治会とクラブ役員で情報収集し、対策協議	ポイント 数日間の炊き出しについて話し合いました。
	昼からアルファ化米 100 食分の炊き出しを開始	
	町内を巡回し、再度、高齢者や障がい者に八王寺公民館への避難を呼びかけ	
	近隣の八王寺中央公園にある防災倉庫から米や水、毛布、乳幼児関連品を調達	ポイント 防災活動で得た知識が役立ちました。
	避難者へ運営の手伝いを呼びかけ	
4 月 16 日	本震	ポイント 避難者にもできることがたくさんあります。
	(ボランティアが八王寺中央公園にて炊き出しを開始)	
	八王寺公民館で炊き出しを実施 (11 時と 17 時)	
		ポイント 公民館への避難者は 60 名でしたが、車中泊などの避難者が食事を求め、延べ 600 名へ配給しました。
4 月 17 日	夜の炊き出し後に自主避難所を閉鎖	ポイント クラブ員自身も被災していたため、体力の限界でした。閉鎖後は、指定避難所へ避難者を誘導しました。
4 月 19 日	自主避難所閉鎖後も 28 日まで八王寺公民館にて支援物資を配布、管理	
5 月 8 日	指定避難所 (春竹小学校) を閉鎖	

地域の声から生まれた「春竹防災の日」

春竹校区では、平成 25 年から「春竹防災の日」を定め、防災活動を行っています。きっかけは東日本大震災 1 年後に行われた「まなぼうさい」のアンケートで、地域の方々が災害に対し「不安を感じている」と判明したことでした。

これを受け、平成 25 年 3 月に自治協議会と社会福祉協議会の共催で第 1 回の「春竹防災の日」を開催しました。

第 2 回までは住民を対象とした催しでしたが、第 3 回からは「自主防災クラブまたは自治会長の研修」と「校区の全住民を対象とした避難訓練と体験学習」に分けて年 2 回開催しています。校区全体の催しでは春竹小学校児童による防災標語の表彰も行っています。

平成 28 年 3 月の「自主防災クラブまたは自治会長の研修」では HUG の演習を行い、避難所運営の大変さを疑似体験し、「各町内に持ち帰って勉強会をしよう」と話をしていた 1 か月後、実際に避難所運営に携わることになりました。



第 2 回「春竹防災の日」の様子



第 1 回の案内チラシ

「春竹防災の日」防災標語最優秀作品

平成 26 年度「そなえれば 体も安心 心も安心」春竹小学校 4 年
 平成 28 年度「まさかより もしものために そなえよう」春竹小学校 1 年
 平成 29 年度「避難しよう となりの人にも 声かけて」春竹小学校 4 年

自主防災クラブまたは自治会長の研修

目的：各町内に持ち帰って取り組むこと
 主な実施内容：まち歩き、地図づくり、
 避難所運営ゲーム (HUG) 等

校区の全住民を対象とした避難訓練と体験学習

目的：住民への意識啓発
 主な実施内容：学校までの避難訓練、
 専門家の講演、パネル展示等

熊本地震の教訓を踏まえた今後の課題

1. 災害時における町内と校区全体の役割兼務の難しさ

町内自治会長と校区社会福祉協議会長の役割兼務は、平常時は可能でも災害時の同時遂行は困難であった。普段から地域内の各種団体との連携を深めたい。

2. 自主運営の避難所と行政との連携

自主避難所である八王寺公民館やボランティアが炊き出しを行った八王寺中央公園では、行政からの支援がなかった。行政との連携体制を検討したい。

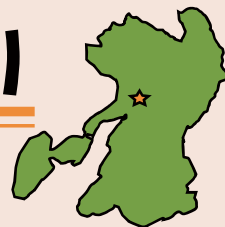
3. 集合住宅への情報発信

回覧やチラシ、ハンドマイクなどで情報発信したが、オートロックや掲示板のない集合住宅などでは住民への情報伝達が困難だった。対応を行政などと検討する必要がある。

地区の基本情報 (人口、世帯数、高齢化率は平成 30 年 2 月時点)

人口	14,771 人	世帯数	7,901 世帯	高齢化率	25.1%	想定される主な災害	洪水災害、地震
地理的条件	白川の左岸に位置し、18 町内から構成されている。校区の中心を走る JR 豊肥線で南北の往来が限定されている。集合住宅や大型商業施設が集約し、世帯情報が乏しい。						

「でくるしこ」でつなぐ防災まちづくり



こうざん
向山校区まちづくり委員会 (熊本市中央区本山地区)

熊本地震時による被害と活動状況

本震により、本山地区では水道とガスが寸断されました。向山小学校では天井の一部が落ちそうであったため、江南中学校には前震時と一桁違う避難者が集まりました。

そのような状況下で、向山校区まちづくり委員会は自治協議会などの校区内の団体と協力し「3日間は自分たちで頑張る」と決意して避難所運営に取り組みました。

5月8日まで続いた江南中学校での避難所運営は、中学生によるトイレへの水運び、卒業生による車の誘導、避難者によるトイレ掃除など多くの人が自然と役割を担いました。

熊本地震時の自主防災組織の主な行動

- 平成28年
4月14日
- 前震
 - 自治協議会会長の判断で現地災害対策本部を江南中学校（指定避難所）に開設
 - 小学校体育館の天井が一部落ちそうだったため、住民を車や他の避難所に誘導
- 4月15日
- 中学校の調理室を借りて朝から炊き出しを開始
 - アルファ化米が足りず米屋からお米を購入
- 4月16日
- 本震
- 4月17日
- 「3日間頑張れば」と思っていたが、その後も避難所運営を継続
- 4月30日
- 指定避難所閉鎖に向けて「学校をこどもに返しましょう」キャンペーンを開始
- 5月2日
- 備蓄倉庫をつくるための助成金を申請
 - 指定避難所運営の主体を市の職員に移し、ボランティアとして運営に参加
- 5月8日
- 指定避難所（江南中学校）を閉鎖
- ポイント** 夏祭りなどの行事を通じて学校とのコミュニケーションがスムーズでした。
- ポイント** 避難所の閉鎖に向けて笑顔で挨拶と声かけをしました。
- ポイント** 大変な時期でも情報を見逃さずに確認していました。

熊本地震前からの取り組み

向山校区まちづくり委員会は平成9年4月に発足し、「**でくるしこでよかけん（できる時にできることをしてくれたらいいですよ）**」をキーワードに活動してきました。

平成20年、夏祭りの準備で集まった際、その年5月に中国で発生した四川大地震が話題に上り、関連してその場にいた年配者から昭和28年6月26日に発生した白川水害で向山校区が浸水したことを知らされました。

この出来事をきっかけに、平成20年12月には「向山校区の防災を考える講演会」を開催し、その後もクロスロードゲームやまち歩き、防災マップづくり、避難訓練などを実施してきました。



夏祭りの様子

まちづくりは「いざという時の助け合いのチカラになる」

様々なまちづくり活動が続ける中で、夏祭りや清掃活動、体協の体育祭、コミュニティセンターの文化祭、防犯協会の防犯パトロールなど一見防災に直接関係ないと思われるような活動やイベントが、「いざという時の助け合いのチカラになる」ことに気づき始めました。その後、まちづくりの活動の柱として地域防災の視点を意識するようになりました。

熊本地震の教訓とその後の対応

1. 物資を保管する倉庫の設置

備蓄の重要性を実感したため、水・アルファ化米・おむつ・消毒液などを保管する倉庫を江南中学校内に設置しました。また、日付を確認し、物資の入替えにも注意を払っています。

2. 地区防災計画の策定（平成29年2月）

平成28年6月にワークショップを開き、今後に備えるための意見を集め、平成28年11月から本格的に地区防災計画の策定に取り組みました。

避難者名簿の作成や避難所スケジュールや炊き出しルールの作成、井戸水マップの作成など8つの事項に取り組むことを議論しました。



ワークショップの様子

避難者受付カード		受付番号
「避難者受付カード」に記載された情報は、掲載されている方の入室や居室を控し、避難所への移住や被災地の帰郷に活用します。災害発生時の避難支援に、被災避難者の方々の生活支援のために活用します。必ずしも早期に返却が必要となりますのでご理解ください。		
代表者名	電話番号	全名
町内	〒	〒
【避難所】	体育館	車中泊舎
【ペット】	はい/いいえ	はい/いいえ/その他
氏名	男・女	歳
医療支援	介護支援	
資格	できる仕事	
氏名	男・女	歳
医療支援	介護支援	
資格	できる仕事	
氏名	男・女	歳
医療支援	介護支援	
資格	できる仕事	
氏名	男・女	歳
医療支援	介護支援	
資格	できる仕事	
氏名	男・女	歳
医療支援	介護支援	
資格	できる仕事	
氏名	男・女	歳
医療支援	介護支援	
資格	できる仕事	
氏名	男・女	歳
医療支援	介護支援	
資格	できる仕事	
【医療支援】：1. 担子 2. 担子持ち 3. 担子持ち 4. 担子持ち 5. 担子持ち 6. 担子持ち 7. 担子持ち 8. 担子持ち 9. 担子持ち 10. 担子持ち 11. 担子持ち 12. 担子持ち 13. 担子持ち 14. 担子持ち 15. 担子持ち 16. 担子持ち 17. 担子持ち 18. 担子持ち 19. 担子持ち 20. 担子持ち 21. 担子持ち 22. 担子持ち 23. 担子持ち 24. 担子持ち 25. 担子持ち 26. 担子持ち 27. 担子持ち 28. 担子持ち 29. 担子持ち 30. 担子持ち 31. 担子持ち 32. 担子持ち 33. 担子持ち 34. 担子持ち 35. 担子持ち 36. 担子持ち 37. 担子持ち 38. 担子持ち 39. 担子持ち 40. 担子持ち 41. 担子持ち 42. 担子持ち 43. 担子持ち 44. 担子持ち 45. 担子持ち 46. 担子持ち 47. 担子持ち 48. 担子持ち 49. 担子持ち 50. 担子持ち 51. 担子持ち 52. 担子持ち 53. 担子持ち 54. 担子持ち 55. 担子持ち 56. 担子持ち 57. 担子持ち 58. 担子持ち 59. 担子持ち 60. 担子持ち 61. 担子持ち 62. 担子持ち 63. 担子持ち 64. 担子持ち 65. 担子持ち 66. 担子持ち 67. 担子持ち 68. 担子持ち 69. 担子持ち 70. 担子持ち 71. 担子持ち 72. 担子持ち 73. 担子持ち 74. 担子持ち 75. 担子持ち 76. 担子持ち 77. 担子持ち 78. 担子持ち 79. 担子持ち 80. 担子持ち 81. 担子持ち 82. 担子持ち 83. 担子持ち 84. 担子持ち 85. 担子持ち 86. 担子持ち 87. 担子持ち 88. 担子持ち 89. 担子持ち 90. 担子持ち 91. 担子持ち 92. 担子持ち 93. 担子持ち 94. 担子持ち 95. 担子持ち 96. 担子持ち 97. 担子持ち 98. 担子持ち 99. 担子持ち 100. 担子持ち		
避難所のルールを確認しました。避難所の生活ではルールに従います。		
年 月 日	代表者氏名	

地区防災計画の議論の中で作成した避難者受付カード

「いざという時の助け合いのチカラになる」

避難所でのルール

避難所は公共スペースです。避難所運営者も被災者です。お互いに助け合いましょう。ルールを守り協力して集団生活をしましょう。

- 避難所は禁煙・禁酒です
- 1日1回はスケジュールと掲示板を確認しましょう
- できる仕事を分担し、避難所運営に協力しましょう
- 物資は人数があるとは限りません。物資の量が十分でない場合は、皆で1つや2人で1つなどの提供方法にご協力ください
- 物資が産廃し、近隣のスーパーやコンビニが再開した際は、炊き出しを順次縮小していきます
- 個人のスペース・持ち物は個人の責任で管理をしてください。清潔に保ち、周囲の人へ不快感を与えないようにしましょう
- ゴミは指定された場所に分けて捨ててください
- ベットは指定された場所についてください。ベットと避難する際の別ルールを確認してください
- 不審者を見かけたら避難所運営本部へ連絡をしてください
- 学校再開に向けて避難所スペースの縮小にご協力ください
- 災害の種類や状況によってルールが変更されることがあります。掲示物に注意してください

車中泊の方は、フロントガラスに車中泊用の受付表を掲示してください。決められたスペースに駐車し、通行箇所を守ってください。決められた移動時間までは待機するようにしてください。事故は各自の責任です

避難所を退去する際は下記に記入の上受付に提出してください

避難所を退去します。 _____ 年 月 日

代表者氏名 _____

3. 連絡体制の強化

平成27年度末に自治協議会内で「向山校区防災団体連絡協議会」を立ち上げました。熊本地震は組織固めをしていこうと思っていた矢先の出来事だったため、地震後に策定した地区防災計画の中には連絡体制の強化を盛り込みました。

地区の基本情報（人口、世帯数、高齢化率は平成30年2月時点）

人口	10,885人	世帯数	5,536世帯	高齢化率	21.8%	想定される主な災害	地震、洪水災害
地理的条件	白川の左岸に位置する。向山校区は20町内から構成されている。JR熊本駅に近く、平成23年の九州新幹線開業前後から集合住宅が増加している。校区内に市立向山幼稚園、向山小学校、江南中学校があり、長い人は幼稚園から中学校まで12年間を同級生として過ごし卒業後も交流が続く。						

防災地図が役立つ安否確認



まいのほら

舞原自主防災クラブ（熊本市南区城南町舞原地区）

熊本地震による被害と活動状況

城南町舞原地区は本震で震度 6 強を記録し、全壊や大規模半壊など、多くの建物が被害を受け、地区全体が断水しました。

平常時から積極的に活動していた舞原自主防災クラブは地震発生後、即時に安否確認を行い、自主避難所の運営を行いました。

また、災害によって発生したゴミへの対応や仮設風呂の設置など、行政の手が行き届きにくい問題も自主防災クラブの努力によって解決していきました。



舞原公民館の駐車場で一夜を過ごす地域住民

熊本地震時の自主防災組織の主な行動

平成 28 年
4 月 14 日

- 21:26 前震 **わずか 10 分!**
- 21:36 舞原地区防災本部を公民館に開設
- 22:00 安否確認を開始
- 23:30 熊本市城南支所から災害用毛布を受領



舞原地区防災本部の様子

4 月 15 日

- 0:25 倒壊家屋や取り残されている人の有無を確認
- 1:00 公民館近くに野外トイレを設営
- 2:00 給水車の水を袋詰め

ポイント 事前に水を袋詰めしたことで大きな混乱もなく、多くの住民に効率的に配給することができました。

4 月 16 日

- 1:25 本震
- 1:35 舞原地区防災本部を再び公民館に開設
- 1:40 安否確認を開始
- 6:45 アルファ化米の炊き出し
- 11:00 中学生や高校生の学生ボランティアとともに救援物資（食料品等）の配給（以後 10 日間継続）

ポイント 会議で役員が直接、情報交換することで確実に情報を伝達することができました。

4 月 17 日

班長を含め、地区の被害状況を把握する会議を開催（夕方 6 時に公民館にて開催し、以後 1 週間継続）

4 月 21 日

市管理の空き地をゴミ集積場とするよう市に要望

4 月 23 日

自治会会員世帯へ「ゴミの処理方法」のチラシを配布

自衛隊に仮設風呂の設置を要望

4 月 26 日

舞原地区防災本部を解散



自衛隊による仮設風呂の設置

熊本地震前からの取り組み

舞原地区では熊本地震発生前から自主防災クラブを中心として防災活動を行っていました。地元有志による月1回の座談会では、自主防災組織の規約や計画を考え、災害時の共助の力を養うため、「どんどや」などの催しも実施し、「顔の見える関係」づくりに取り組んできました。

H23

・住民の寄付と補助金で舞原公民館を新築

(熊本地震時に舞原地区防災本部兼避難所となる)

H24

・自主防災組織の規約と計画を6か月間かけて考案

H25

・自治会総会で防災計画を説明(以降毎年実施)

・「どんどや」の復活(以降毎年実施)

H26

・地震想定での防災会議と訓練を実施(以降年2回実施)

H27

・舞原地区の防災用住宅地図(約1.0×1.5m)を作成

・「舞原自主防災の集い」(勉強会)を実施



復活した「どんどや」



舞原地区の防災用住宅地図

熊本地震時に役立った4つの取り組み

1. 舞原公民館の建替え

平成23年に舞原公民館を新築したことにより、安全性の高い建物で防災本部を設置し、公民館を拠点として活動することができました。

2. 安否確認体制の確立

隣保班ごとに1年交代で班長を決め、さらに班長をまとめる理事を置くことで、住民からの安否情報が班長から会長へ円滑に流れる体制を整えました。また、多くの住民が班長を経験することで、防災への意識を高めていくねらいもあります。

3. 地域の絆

平成25年に「どんどや」を復活させ、その他にも地域のイベントを開催していたことで、「顔の見える関係」が構築できており、速かに安否確認などに取り掛かることができました。

4. 防災用住宅地図の作成

地区内のすべての住宅を確認できる大判の地図を作成していたため、迅速に安否情報等を整理することができました。

熊本地震の教訓を踏まえた今後の活動

- 自宅に不在だった人への情報伝達が行き届かなかった → **班ごとに携帯電話による緊急連絡網を整備する**
- 安否確認の体制は作れていたが、一部の班では機能しなかった → **班長を初めとし、安否確認の要領を徹底する**

地区の基本情報 (人口、世帯数、高齢化率は平成30年2月時点)

人口	2,107人	世帯数	819世帯	高齢化率	18.3%	想定される主な災害	地震
地理的条件	平坦な地形であり、緑川や浜戸川からは距離があるため、洪水の危険性は低い。						

熊本県防災情報メールサービスへ登録を！

熊本県に関する防災情報などをメールで受けることができます。最新の気象情報、避難情報等が即時に送信されますので、災害への備えとしてお役立てください。

メール配信サービスの登録・変更は、こちらに空メールを送信してください。

entry@anshin.pref.kumamoto.jp

(このメールは、本サービスの運営を委託している事業者へ直接届けられます。)

《ご注意下さい》

携帯電話などで迷惑メール防止対策の設定をされている方は、登録される前に **bousaimail@anshin.pref.kumamoto.jp** からのメール受信が可能ないように設定を行ってください。



平成28年熊本地震に関する写真や映像等をデジタル化して公開しています。

<http://www.kumamoto-archive.jp/>



自主防災活動事例集 熊本地震対応編

平成30年3月

発行：熊本県

〒862-8570

熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

Tel:096-383-1111

協力：熊本大学大学院先端科学研究部

准教授 竹内裕希子

編集：熊本県知事公室危機管理防災課

株式会社地域計画連合

表紙：熊本県立大学環境共生学部

助手 古賀遼也